

毎年八月になると戦争が話題になる。戦後七七年の今年も繰り返すだろう。そこで、最近の売れっ子、望月衣塑子著「武器輸出と日本企業」を読んだ。六年前の出版なので、現在の社会情勢に立ってない。

一言で云うならば、著者の考え方は先の戦争の反省から平和憲法を持った故、武器に関わることはこの精神に反する。戦後長い期間に渡り、大学、研究機関は軍事研究に関わらない規律を維持してきた。しかし、それが最近緩んできた。委託研究で防衛省の予算を受ける研究機関が出てきた。研究は民生用にも、軍需用に使えるデュアルユースの研究であると主張されているが、著者はこの流れに賛成しない。しかし、この流れが生じていることは認めている。武器輸出は戦争に加担すると述べている。だが、もっと高い視点の国際的に通用する国家感が欠けている。

一方、先の戦争で武器の開発に加担したと著名な科学者を戦争協力者とし挙げている。一例として、朝永振一郎がマグネトロンの研究者で挙げられている。しかし、この記述に異論がある。マグネトロンは岡部金治郎が世界で最初に発明したものだ。また、八木アンテナも同様にレーダに不可欠な要素である。にも拘わらず、当時の日本には艦船用、航空機用レーダを実用化する統合的な視点を持つ工業力がなかった。朝永振一郎は複雑な形状のマグネトロンの共振周波数を手で計算した。

日本は大艦巨砲の考え方から抜け出せず、米国の製品化されたレーダの探知と、機動性に優れた戦闘機によつて艦船は殲滅された。短期間に米国の頭脳を集中させ、レーダとマイクロ波製品の実用化を達成した成果は MIT Radiation Laboratory Series の二〇余冊に上る技術書に誇らしく記述されている。

そして、その技術は戦後日本全国の電話回線のマイクロ波網として、また、各種船舶のレーダとして活用されている。戦争は時の政府が政治判断で行うもので、単に武器が揃ったから戦争になるものでもない。勿論、武器が世の中からなくなり、戦争もなくなることは喜ばしいが、残念ながらそのようにはなっていない。